

平成30年度岡山県立記録資料館運営協議会 議事録（概要）

- 1 日 時 平成30年10月16日（火） 13:30～15:15
- 2 場 所 岡山県立記録資料館 研修室
- 3 出席者
（委 員） 奥田哲也、沢山美果子、清水玲子、築島尚、服部真理（敬称略、50音順）
（事務局） 岡山県立記録資料館 定兼館長他
- 4 傍聴者 なし
- 5 館長開会あいさつ
- 6 新任委員の紹介 築島委員
- 7 職員紹介
- 8 議 題
 - (1) 委員長等の選出について
 - (2) 平成29年度事業報告について 資料：平成29年度記録資料館年報
 - (3) 平成30年度事業の現況等について 資料：平成30年度事業の現況等
 - (4) 平成30年7月豪雨による災害への対応について
資料：平成30年7月豪雨による災害への対応
 - (5) 平成31年度事業計画（案）について
 - (6) その他
- 9 委員長等の選任
沢山委員を委員長に選任
奥田委員を副委員長に選任
- 10 議 事
委員長により議事進行
 - (1)「平成29年度事業報告」について（事務局から説明）
（委 員） 公文書収集は、まんべんなく収集しているわけではないのか。

産業労働部は観光課のみだが、どうしてか。

(事務局) この年は、こうなったが、県庁全体で 10,000 点余の廃棄リストが提出され、チェックを入れて収集する。その時、チェックした公文書で、原課がまだ常用として使いたいと申出があるものは、収集しない。

(委員) 廃棄されているわけではなく、原課で保管されているのか。

(事務局) そうである。

(委員) 瀬戸大橋ができた時、報道のために、職員の個人的な記録を借りたことがあるが、これは公文書に含まれないのか。

(事務局) 我々は、公文書と認識している。出所は個人でも、扱いは公文書である。

(委員) 現在進行中のものは、原課としては出しにくいと言われたが、終わったものはどうか。

(事務局) 終われば引き継ぐようにしているが、難しいところがある。公文書の収集と廃棄は規程では、はっきりしているが、趣旨が必ずしも周知徹底されず、うまく実施できないことがあり、難しい。

(委員) 担当により、終わったかどうか判断が違うのではないか。

(事務局) それは有りうる。収集権限は、当館が持つが、廃棄リストを総務学事課長から館長に引き継ぐとき、済んだために廃棄リストから外すこともある。

(委員) 29年度の来館者数等について、特徴はあるか。

(事務局) 日常的に資料を見たい人は変わらないが、講座の紹介や展示について記者発表するので、それに応じて来館する人もいる。

反響があったものは、宮本常一に関する講座が多かったと思うが、記録資料館の名前ではなく、宮本常一の名前で講座に来館している。

古文書解読講座は、例年希望が多いので、お応えしたいと思っている。

展示では、失われた学校に関しては興味がある方が多かった。自分の身体記憶として残してほしいとの思いがあるようだ。

2 議題 (3) の資料に利用者数の推移等を年度で比較したものがあるが、展示コーナーの観覧は増えている。利用申請は、2 階の閲覧室利用者になるが、ある程度固定化している。

講座についても毎年あまり変わらない。

29年度で残念だったのは、アナウンス不足で、企画展の記念講演会に、神崎宣武先生をお呼びし期待したが、思うように人が集まらなかった。県内の各機関と講演会が重なる時期で、PR や時期について考える必要があると思っている。

ここ 2 ~ 3 年、企画展の講演会が他機関の講演会と重なり、あまり芳しくない。

(2)「平成30年度事業の現況」について(事務局から説明)

(委員) デジタル化を中心に進めているが、マイクロフィルム化もしている。あえてマイクロフィルムにしないといけないものがあるからと思うが、マイクロフィルム化とデジタル化の兼ね合いについて説明してほしい。

(事務局) デジタルについて我々はまだその永続性などについて信用していないところがある。マイクロにしてからデジタルにする。直接デジタルにすることは進めていない。アーカイブズについては、マイクロ化ののちデジタル化している。

公文書もデジタル化の流れはあるが、デジタルは改ざん可能なため、原本性が担保できない。高精細カラーについてはデジタルデータが利用しやすいが、フィルム撮影して、デジタル化する方式をとっている。直接デジタルにする時代が来ると思うが、しばらくは、マイクロフィルム化の手続きをまず踏んで、やっていく。

(委員) 公文書が、紙にならないものが増えているが、デジタルのまま引き取ることは。

(事務局) 今は受けていない。岡山県は電子化が進んでいない。全てが紙ベースのファイルである。

(委員) 今後は、公文書がデジタル化すると思うが、長い見通しで対応を考えていくのか。

(事務局) そのとおりである。

現在、情報政策課が電子システムのリーダーシップをとっている。当館は、総務学事課の行政情報・不服審査班とセットで仕事をしている。情報政策課は、デジタルアーカイブズのセキュリティー関係をしている。今後どうなるかは未定である。

(委員) ボランティアと同好会の年齢層が違うが、それは要件なのか。

(事務局) 要件ではない。結果的にそうなっただけである。無職でない人もいる。

(委員) 適正な人数と思っているのか、増やそうと思っているのか。

(事務局) 現状は、担当する職員がいるので、このくらいがちょうどいいが、もう少し増やすことは可能である。

(委員) 継続の人が多いいのか。

(事務局) 継続が多い。

(委員) ホームページのアクセス数が多くなっているが。

(事務局) 提出資料が誤っていた。倍にはなっていない。アクセス数の比較は、例年より若干の増である。

今年は、昭和31年、32年の写真をデジタルで公開したり、目録情報の

公開に取り組んでいる。

(委員) 様々なイベントをしているが、参加者が数十人のケースが多い。もっ
たいたないと思うが、今後の方針として広報活動を改善する考えは。

(事務局) 現在の県の力量ではこの程度と考えている。

大きなイベントをドンとするより、小さなイベントを数打つことを考えて
いる。ホームページも少しでも更新していると伝えないと、見てもらえない。

記録資料館の中身は進化していることを広報したい。

講演を聞いた人の声を発信する手立ても考えたい。

(委員) 企画展は時期に問題があるのでは。10月は他にも多いので、時期をずら
すことは。

(事務局) 時期は、再考したい。御提案に感謝する。

(委員) 館の資料を使用したことのある研究者を講師に呼ぶのはどうか。

資料を使って論文を出したり、本を出版したりした場合、必ず、ここに送
られてくるのか。

(事務局) 道義として送ってもらっている。我々が想定しているより広い範囲の
人が利用している。これが重要だと思っている。

(3)災害対応について(事務局から説明)

(委員) この資料は、わかりやすい。

(事務局) これをベースにホームページに発信しようと思っている。

(委員) こんな支援があったと、次年度にこの資料を利用して他の図書館とかで
公開すれば、支援の輪が広がったり、県立記録資料館のことも知ってもらえたり
するのでは。岡山の豪雨災害は全国でもニュースになっているので、何をし
ているとか、こういう作業もあることがあるとわかって広がるのでは。

(委員) ホームページに載せるのか。

(事務局) とりあえず、ホームページを考えている。

どこでも起こることなので、日ごろから考えてもらいたい。

(委員) 今、ほぼ目途が立ったというのは、真備図書館から持ち帰った被災資料
についてのことか。

(事務局) そうである。

(委員) 地元の民間を含め、まだまだいろいろあると思うが、今後はどうするの
か。

(事務局) 倉敷市の真備支所の公文書や六つの学校や園の公文書については、市が
検討していると側聞している。

我々にお手伝いの要請があれば、今回のノウハウの蓄積をお伝えできると
思っている。

民間資料については、岡山史料ネットや他機関と情報を共有しながら支援を進めていきたい。

当館の業務は県の災害支援の中で行っており、館の業務は県の業務として実施している。県としてはまず、公文書を思っており、個人蔵の古文書等についても、ノウハウを伝えていく。

(委員) 公立の記録資料館の役割として、アピールできるものと思う。

記録資料館に関心を持ついろいろな人が関わってくると思うが、資料レスキューは新たな人を呼び込むことにもなろう。資料の大切さに気付くきっかけにもなると思う。

(事務局) ありがとうございます。

(委員) 全国的な大規模災害の対応関係、連絡関係やネットワークづくりはどのようになっているのか。今後の方針はあるのか。大規模災害で全国的な連絡組織を活用して助け合うなどの方針はどうか。

(事務局) 基本的には文化庁を中心の文化財保護ネットワーク、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会（全史料協）、歴史博物館協議会など横のネットワーク化が進んでいる。

また、ボランティアの全国ネット化も進みつつある。

その中でどのようにしていくかは、ケースバイケースである。

全史料協が支援要請するかたちで、機関から出張している場合もある。

(4)平成31年度事業計画(案)について

(事務局) 記録資料館は、書庫の収容能力は決まっているが、アーカイブズはどんどん増えている。書庫の満杯にどう対応したらよいかが常に懸案である。書庫狭隘化に対し、5段書架を6段にすることをすすめている。

また、収集した公文書や今あるものの再整理のための人材、職員を増やしていく。これが31年度以降の課題。書庫狭隘化対策のための職員、資料整理する職員を配置し、収集で原課とやり取りできる職員の専門性を高めていかねばならないと思っている。

事業計画については、提言いただいた企画展の開催時期、講座の開催時期等について再度検討しながら、展示会、研修会、講座でも工夫を凝らしながら実施していく。

平成がここで終わるので、平成時代が何だったのか、アーカイブズから何が語れるのか、一つの元号の改元から自分たちを見つめる展示会を企画したい。節目節目にアーカイブズが重要なことを進めていく。他の館もやると思うので、全県的にやろうと他機関にも連携を投げかけていきたい。

さらに、アーカイブズのデジタル化を進めていく。そのために、職員の資質を充実させて、書庫狭隘化等将来を見据えた、内実のある展示会を開催したい。

(5)その他について

(事務局) 平成31年度の事業について説明したが、こんなのはどうかといった提案があればお願いしたい。

(委員) 瀬戸大橋の30年、明治150年も今年か。

(事務局) 今年である。

(委員) 来年の平成の振り返りは、当館だけでなく、他の機関と連携して、広がりを持った企画をしては。

(事務局) そのご提案を有り難く受け止めたい。

(委員) 連携の組織はできているのか。

(事務局) 呼びかけに応じてくれる担当者がある。呼びかけをすると頑張る人がおり、どんどん広がっていく。できる人はやろうという。

(委員) 職員増員やデジタル化については、その専門の人から話を伺うなり、そういった人を職員にし、助言を受けながら長期計画を作成しながら、その中で位置づけて、職員増員計画、デジタルに強い職員を採用していくなどと長期的ビジョンと結びつくのではないか。

(事務局) 重要なことと思う。

(委員) 新年度になると企画展まですぐなので、準備を早くしないといけないが、他の施設では考えていないところもあるので、リーダーシップをとってほしい。

(事務局) 社会問題を考えれば、少子高齢化社会などが一番の問題だと思っているが、世相にリンクするのは難しい。

(委員) 平成を見る展示は1回だけか。

(事務局) 来年はそう思っている。

(委員) 例えば、テーマに焦点を当てて、第1回、第2回とか。

(事務局) いいかもしれない。

(事務局) 公文書では、30年原則があり、30年たてば公開するというがあるので、ちょうどいい。

(委員長) 以上で議事を終了する。